

第2回 門真市学力向上対策委員会 議事録

1. 開催日時 平成24年7月23日(月) 午後3時～4時45分
2. 会 場 門真市教育委員会3階会議室
3. 出席委員数 11名/11名
4. 傍聴者 3名

学力向上対策委員名

森田 英嗣 委員 (大阪教育大学教授)
角野 茂樹 委員 (関西外国語大学教授)
山口 周作 委員 (門真市立五月田小学校長)
伊藤 義昭 委員 (門真市立第五中学校長)
小寺 弘明 委員 (門真市立第二中学校教頭)
植原 宏仁 委員 (門真市立大和田小学校教諭)
阪上 広太郎 委員 (門真市立第七中学校教諭)
柏井 了子 委員 (門真市PTA協議会役員)
川村 早余子 委員 (門真市PTA協議会役員)
藤井 良一 委員 (門真市教育委員会学校教育部長)
柴田 昌彦 委員 (門真市教育委員会生涯学習部長)

事務局

苗代学校教育課長 満永学校教育課参事 岩佐学校教育課参事

課 長：ただ今より門真市学力向上対策委員会を開催いたします。委員の皆様方には、お忙しい中、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。森田委員長に司会進行をお願いする前に、私のほうから事務連絡および前回の確認等をさせていただきます。申し遅れましたが、門真市教育委員会学校教育課長の苗代でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、全委員にご出席いただいております。委員会設置要綱第6条第2項(委員会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。)の会議の開催要件であります半数以上の出席があるということで、会議が成立することを宣言させていただきます。

課 長：それでは、本日の配付資料の確認をお願いいたします。全部で8点でございます。

① 第2回 門真市学力向上対策委員会 会議次第

- ② 本日の座席表
- ③ 平成24年度教育研究指定校一覧
- ④ 平成24年度授業改善研修
- ⑤ 門真市学力向上対策委員会年間スケジュール
- ⑥ 連絡先
- ⑦ 第2回 門真市学力向上対策委員会 授業づくりについて
- ⑧ 第1回 門真市学力向上対策委員会議事録

漏れているものがありましたらご連絡くださいますようお願いいたします。

課長：まず、前回の議事録についてであります。議事録につきましては、事前に委員の皆様にご確認いただき、確認済みのものを配付しております。現在、門真市のホームページや情報公開コーナーにて公開しております。

さて、第1回委員会で、授業づくり、家庭学習、学校組織、生徒指導の4点を中心に議論いただくことになりました。本日第2回委員会では、授業づくりに焦点をあて、門真市における現状と課題、取組を議論いただきたいと考えております。市教委では、8月より平成25年度の予算要求・折衝が始まります。みなさまのご意見や提言を、来年度の学力向上にかかる市の施策に反映させていければと考えております。

それでは、森田委員長、よろしく願いいたします。

委員長：みなさま、こんにちは。お暑い中、お集まりいただきありがとうございます。前回、門真市の現状を把握し、授業づくり、家庭学習、学校組織、生徒指導の4点が課題になるのではないかと話し合いました。今日は、「授業づくりについて」が議題となっております。まず、事務局より説明をお願いします。

事務局：第1回目委員会では、「魅力ある授業づくりを。」という貴重なご意見をいただきました。今日は、門真市の授業づくりの実態をデータをもとに説明します。前回質問があった際に、お示しすることができなかった資料も準備しています。

子どもの学習意欲面に関するデータをご覧ください。まずは、無解答率についてであります。平成20年度（全国調査）、平成21年度（全国調査）、平成23年度（大阪府調査）の3か年を比較すると、小学校国語A・B、小学校算数Bでは、年々、無解答率が減っています。中学校は、国語B、数学Aにおいては、徐々に無解答率が減っています。数学Bは、平成23年度に問題の難易度がアップしたため、無解答率が上がったものとらえています。

国語の授業の理解度は、小・中学校ともに、年々上がっています。小学校算数は、年度によって上下しますが、中学校数学は、年々上がっています。「子どもたちは熱意をもって勉強に取り組んでいるか。」との学校質問紙では、門真市の小学校では、86%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」との回答でしたが、中学校では、約50%にとどまっています。このことから、一生懸命に学習に取り組む子どもを育てていく必要

があると考えています。

「国語が好きだ」と答えた子どもは、小・中学校ともに、約50%でした。中学校では、「国語が好きだ」と答える子どもが年々増えています。「算数・数学が好き」と答えた子どもは、約50%でした。さらに、国語好き、算数・数学好きな子どもに育てていくことが求められます。教室の掲示物など、「学習意欲を引き出す環境づくりをよく行っている。」と答えた小・中学校は、大阪府の平均と比べると割合が低くなっています。

これらのデータから、学習意欲が低く、好きな勉強に出合えていない門真市の子どもたちの学びへの意欲を高めていくことが重要であると考えています。

授業規律、学習ルールについては、授業中の私語、落ち着きに課題があります。特に中学校では、大阪府や全国の平均値と比べると低くなっています。このことから、子どもたちが、学びへの姿勢やルールをつける取組が必要であると考えています。

次に、授業の中身についてのデータをご覧ください。「授業のめあてを明確に示しているか。」という問いに対して、小・中学校とも、ほとんどの学校で、「示している」と答えています。一方、子どもたちにきいてみると、「国語の時間に、その時間にめあてや目標を持って活動している。」と答えた子どもは、小学生は約50%、中学生は約36%でした。先生は、めあてを示しているつもりでも、子どもは、先生が思っているほどめあてを認識していないということがわかります。

「子どもの発言や活動の時間を確保しているか。」という質問に対して、小学校は、90%以上が、中学校は半数以上の学校が、「確保した」と答えています。子どもに聞いてみると、「自分の考えをまとめる活動をよく行っている」、「自分の考えを発表する機会がよくある。」、「授業で、みんなで話し合う活動をよく行っている」と答えた子どもは、先生が思っているほど多くはないという結果となりました。また、「本やインターネットを使って調べる活動をよく行っている」と答えた子どもも、全国や府の平均値と比べて少なくなっています。

以上のことから、自分の考えをまとめる学習が少ない、自分の考えを発表する機会が少ない、話し合う機会や調べ学習が少ないということがわかります。だから、先生の説明を聞くだけの授業ではなく、子どもが主体的に学ぶ全員参加の授業にしていく必要があると考えています。

読書活動については、門真では、読書が好きなお子どもが年々増加しています。これは、各小・中学校で、朝読書や図書の充実などが行われているからです。読書好きのお子どもは、学力調査の平均正答率が高いという相関関係も見られ、特に中学生では、顕著です。これからは、さらに読書活動を重視していく必要があります。

門真市では、学校図書館図書標準が満たされている学校はほとんどありません。毎年、新しい本を購入してはいるのですが、古くなった本も廃棄しているため、標準冊数の達成状況がなかなか高くない実態にあります。また、専任の図書館司書は、市として

の配置は行っておりません。

通塾率については、塾に通っていない子どもが、小中学生ともに大阪府平均より多いです。特に、中学校の通塾率は低く、大阪府の平均との差が大きく開いています。塾に通っていない子どもにとっては、学校の先生以外に勉強を教えてくれる人はいないとも考えられるでしょう。だからこそ、授業づくりが大切であり、学校でしっかりと力をつけてやる必要があるのです。

以上で説明を終わります。

委員長：今の説明に関して、質問事項や確認事項はありますか。

資料8ページ「普段の授業で、自分の考えを発表する機会はよくあるか。」の質問は、何年生にたずねたものですか。

事務局：小学6年生と中学3年生です。

委員長：資料を見ると、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた子どもが減っているように見えるのですが、これはどうしてでしょうか。

事務局：平成20、21年（全国調査）の児童・生徒質問紙は「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思いますか。」でしたが、平成23年度は「普段の授業では、自分の考えを発表する機会がよくある。」との質問となっており、きき方が変わっています。平成23年度は、子どもたちが、「自分は積極的に発表しているかどうか」という意味で回答した可能性もあり、このような結果となったのではないかと考えられます。平成20年度と平成21年度を比較すると、「あてはまる」と答えた子どもが減っているのは事実です。

委員：「発表する機会」とは、具体的にどのような機会をさすのですか。

事務局：先生の質問（発問）に対して挙手して発言する機会や、ペアや班で話し合ったことを発表する機会などがこれにあたります。

委員：授業の中で、発表させるための工夫がどれ位なされているかということをつずねる質問なのですね。

事務局：はい、そうです。

委員長：他に質問はありませんか。

それでは、事務局の説明をもとに、今後、市としてどのような施策をとっていくのかということについて、議論をすすめていきたいと思います。

委員：授業の一番の原点は、先生と子どもとが、一時間の中でどう勝負できるかという世界だと思っています。その世界は二つあります。一つめは、担任が子ども一人ひとりの個性や感覚、人間性をいかに的確につかんでいくかということです。二つ目は、子どもの個性をつかみながら、自分が教えようという教科の内容について、どこまで深く知っているかということです。教科の内容をよく知っているということで余裕が生まれ、子どもとのコミュニケーションが深まります。子どもを的確につかんでいけば、一時間の授業

が、子どもにとっても教師にとっても魅力的なものになるだろうと考えています。そのような授業をつくるために、本校でも努力していることでいいなと考えているのは、市の研究指定校制度です。研究指定を受けると、予算もいただけます。予算があれば、外部講師を招いて研修することができます。教材・教具などを豊富に購入することもできます。そしてそのような環境が整うと、校内の教職員の研究意欲が高まります。学校の先生達が、学校の目標や課題に向かって、意識を一つにしながらか研究を進めることができるというメリットが生まれてきます。市の研究指定校制度は、今後もさらに充実していただきたいと考えています。

もう1点は、市として、研究指定校の成果や授業づくりのあり方・考え方などを、新しい形で情報発信していくことが、今後は必要になってくると考えています。

委員：私は、授業をみる機会はありませんが、土曜日に実施されている自学自習のサタスタの様子を見ていると、子どもが集中できる時間は短いです。学校の先生方も苦勞されていると思います。前回の委員会でも、アメリカやドイツの授業の例が出されていましたが、授業中は私語を慎むよう、徹底することが必要なのではないのでしょうか。事務局の説明では、先生は授業のめあてを示しているつもりでも、子どもは認識していないというデータがありました。授業中、子どもにはしっかり緊張感を持たせ、学校でも地域でも家庭でも、集中力を高めることに共通にして取り組み、市全体で高めていくとよいと思います。

委員：今の意見のように、市全体としての方向性を発信してもらえるとありがたいです。各学校それぞれの実態はあると思いますが、まず市としてのプランがあり、それをもとに各校の子どもの実態にあった取組を考えることをしていけないと思います。なぜかという、小学校は担任制で、1年間、2年間任され、その中で子どもと勝負していきます。ある意味、他の先生方が入れなくなる部分や遠慮してしまうところがあります。だから、学校として大きな柱がないと、次の年に担任として任されると、「こんなことをやっていたの？」ということがあったり、積み重ねているはずが毎年違うことをやってしまい、子どもたちが余計に迷ってしまうことも実際にあります。研究指定校もあるので、市教委としていろいろな方向性を発信していくことが必要だと思います。そういうことを受けながら、学校も職員会議等で意見を出し合い、学校の実態にあった方向性を決めていく。いろいろな個性をもった先生がいますが、学校として、児童を「このように育てていく」と、共通認識を持つことが必要であると強く思います。

委員長：各学校の独自性が失われてはいけませんが、市としての一つの共通認識や目標、みんなで取り組めることがあれば、効果ある試みができるのではないかと思います。

委員：私が参観日にみた授業の中では、「中学校の社会科の先生がいい授業をされていたな。」と思いました。子どもが班になっての授業でした。先生の質問に、子ども全員が手を挙げるのです。先生にあてられた班は、答えたことがあつていれば、ポイントがもらえま

す。答えたことだけではなく、忘れ物や提出物もポイント制になっています。その班の子が提出物を準備していない場合には、授業が始まるまでに、他の子がその子に準備をさせるのです。その結果、「忘れ物が減った。」という子もいると聞き、よかったなと思いました。いろいろな見方もあるでしょうが、私は、そういう授業は楽しいなと思います。

委員長：子どものがんばりを引き出す仕組みなのですね。工夫されたいい授業があれば、みんなで学び合って共有化していくようなこともできますね。先生の個性もありますから、その先生の全てを、というわけにはいかないでしょう。しかし、いい部分はどんどん学び、市の中で望ましいものがあり、「まずはみんながそれができるようにしていこうよ。」ということになれば、おもしろい動きになるのではないかと思います。

みなさんの発言から、授業のイメージのようなものが出てきました。「共通の試みがあれば積み重ねもできていくのではないか。」「それぞれの先生のスタイルでやっている、つくっては壊し、つくっては壊すということがあるのではないか。」というお話も出てきました。授業規律という面では、「集中力を高めるための共通の取組もあってもよいのではないか。」という意見も出てきました。「研究指定校ではたくさんの授業研究が行われ、その成果を、市としての考え方だという形で広めていく。」という意見も出ました。

さて、理想とする授業のイメージというものが、門真市の中であるものなののでしょうか。あるとすればどのようなものなののでしょうか。そのイメージがあれば、提示してください。

事務局：今から紹介するのは、門真市内の小学校の授業の例です。この小学校では、学校全体で、数年にわたって国語の音読に取り組んできました。その積み重ねの中で、子どもたちの姿が明らかに変わってきました。

先ほど、委員さんから「子どもたちが全員発言する授業」との発言がありましたが、私どもも、「全員が参加できる授業」にしたいと考えています。

国語の授業の例です。まず、授業のはじめには、起立、礼のあいさつをします。休み時間と授業時間のけじめをつけ、集中して授業を受けるための心構えをつくらせます。

次に、この学校では、必ず授業のめあてを板書し、一時間が終わった時のゴールを示すようにしています。先生だけがめあてをつかんでおくのではなく、子どもたち全員で、一時間に勉強する内容を確認するのです。

この授業では、「物語の本の帯を作ろう」という課題に取り組んでいます。めあてをつかんだあとは、一人で考える時間をとります。子どもたちは、5分間で本のキャッチフレーズとあらすじを書きます。これは、6年生になっていきなりできるというものではありません。これまでの数年間の積み重ねの中でできるようになったのです。また、子どもたちは、ただ「書きなさい。」と言うだけでは書けません。ですから先生は、書く前に物語のキーワードやあらすじ、本の帯の書き方など、書くためのだてを説明します。

子どもらはみな集中し、教室には鉛筆のコツコツという音だけが響き渡ります。先生は、どの子どもも書けるように、困っている子どもに対して個別指導してまわります。子どもたちが書いた本の帯をみると、自分なりのキャッチフレーズや推薦文などを書くことができていました。

次に、班でグループ交流を行い、どの子にも発表させます。各班では、司会が話し合いを進行します。いつも同じ子どもが司会をするわけではありません。毎回、司会の順番をかえて、全員に司会の経験をさせ、司会の仕方を学ばせていきます。各自の発表のあとには、友達が書いたものに対して互いにアドバイスします。子ども同士の関係の中で、語彙が豊かになり、個々の表現も練り直されていきます。

グループ交流の後には、全体で発表します。グループで一度発表しているの、ほとんどの子どもが、「発表したい。みんなに聞いてもらいたい。」と挙手します。本の帯を効果的に発表するために、ICT 機器（大型テレビと書画カメラ）を使っています。発表者は、テレビの画面を見ながら説明します。プレゼンテーションの力もついてきます。聞き手は画面と発表者の方を向いて話をきき、頬づえをついて聞く子どもは、誰一人いませんでした。これも普段から授業の中でしつけられていることです。

発表したあとに、発表者に対してのコメントを伝え合います。聞き手の子どもは、友達の表現のよさをコメントしたり、アドバイスしたりします。発表者の子どもにとっても、「みんながきいてくれる。アドバイスしてくれる。だから、自分の書いたものがもっとよくなるのだ。」と実感できます。だから、発表したくてたまらない子どもに育つのです。このような授業が、門真市の中で広まればいいなと願って、私たちも学校をまわっています。

委員長：一つの授業の例を示していただきましたが、めあてが明確ですし、言語活動が大事にされていきましたね。学習指導要領の中にもあるように、今は、思考力・判断力・表現力が求められていますが、そのような部分も感じられる授業でした。

ここで一つ望ましい授業が示されましたが、今の授業に関して、何か意見はありませんか。

委員：よかったなと思いました。小学校で、今紹介されたような授業ができるのだなと思いました。「門真市だからできない。」というようなことがよく言われるのですが、私は、それが悔しくてここに来ています。今の説明を聞いていて、発表したくてたまらない、たくさんの子が手を挙げている、発表している子どもの方を向いて「いいことを言っているな。」と笑顔できている様子を見ると、うれしいですね。

先週、学校の先生の授業（ディベートなど）がとりあげられたテレビ番組があったのですが、それに似た感じがしました。すごいなと思いました。小学校の先生は担任制ですので、やろうと思えばできるのかもしれませんが、「ちょっとここでは無理かな。」と思っていたことでもできるのですね。門真市だからできないとかそういうことではないの

ですね。これが広がっていけばよいなと思います。

委員長：共通のイメージとは、「できたらうれしい。」とか、「これが広がっていけばすごいことだ。」とか、そういうものであるべきですね。

委員：今の授業は、研究授業ですね。これをまねたいと思う学校や先生方がたくさんおられて、広がっていけばいいと思っています。このような授業が小学校の段階で行われていると、中学校の教師にも「すぐにこのような授業ができるだろうか。」という危機感を感じます。「自分がやれと言われてできるだろうか。小学校の先生はすごいな。」と感じます。

委員長：先ほど、積み重ねということがありましたが、小学校と中学校を連続させていくというような、市としてのイメージもできればいいですね。

委員：全員参加で、司会を全員に順番にさせる。本の帯を書かせる。先生が書き方・やり方、全て説明された後に、一人で書くことが行われています。先生によっては、何の説明もなく、「さあ、やってみよう。」とだけ言われ、子どもが何もできないと「できないのは子どもが悪い。」というような授業をみることもあります。こうやって一つひとつをやれば、子どもはできるのではないかということを再認識することができました。私は、今日ここに来させていただいて、学んだものは多いなと思いました。

委員：市の方針として、門真では小中連携を進めているところです。それは、「こういう授業をやろう。」という認識のもとで、小中学校間で情報交流が行われていると思っています。各学校にはいろいろな工夫をしている先生はいると思います。校区内の小学校ですばらしい取組がされているのに、中学校側が知らないというように、小中連携がまだまだ進んでいないという実態もありますが、縦横のつながり、教師間のつながりを持って、研究授業や公開授業で知り合っていくことで、お互い参考になることがあると考えています。

委員：私も研究授業でいろいろな学校をまわらせてもらっていますが、例のような授業をされている先生は、門真にも少なからずおられます。1回目の委員会でも発言したように、「学校現場の事実を、この場で知ってもらいたい。」という思いで発言させていただきました。前回、「魅力ある授業をしている先生はどれだけいるのか。」というような意見がありました。それが心に重く響いています。

今の授業のような例もある一方で、授業が成り立たない例もあるのも事実です。この門真の現状をどう見ていくか。小学校はある程度力でおさえられる面もあります。「手を挙げなさい。」と言われて挙手する子もいます。しかし、それでは高学年や中学校にはつながりません。そのあたりを真剣に考えて、子どもに力を積み重ねる教育とはどのようなものなのかを考えたい、という思いがあります。そういう意味では、先ほどの発言にあったように、教師が余裕を持つことができれば、押さえつける教育をすることはなくなってくるように思います。

余裕を持つ二つの手だてとしては、子どもをどうとらえるかということと、授業や教科について深く先生が研究していくということだと思います。「一人で考える、グループで考えることは、門真の子には難しい。」という安直な考えの人もいますが、その先生は、子どもをとらえられていないのだと思います。目の前の子どもたちをどう見て、どうとらえ、この子どもたちだからこそ、どういった力をつけないといけないのか、どういった力のつけ方があるのか、それを教師は考える必要がある。だからこそ、教師は人間であらねばならないと思います。形だけが大事であるのなら、機械の方が絶対に完璧なのです。そうではないのは、いろいろな子どもがいて、それぞれの子どもの育てていくからです。子どもをどうとらえていくかというところで、門真の先生もやっていく。それをする中で、私たちの心の余裕にもつながると思います。

「あの子は…」と決めつけるのではなく、どのように理解していくかというところを大事にしなければいけないと、私は門真市教育委員会として提案してもらいたいです。

副委員長：全く同感で、先ほどの授業の先生は、子どもをよく知っていると思います。この日にいきなりこのような授業ができるというわけではなくて、これまでの間に子どもをよく知っているのです。前の授業の子どもの様子もよく知っているのだらうと思います。先ほどからのいろいろなデータをみて気になるのは、「どんな時に、子どもはやる気になるのか。」ということです。

先ほどの発言にもあったように、先生が子どもを理解し、よく知っているから、子どもはあんなに元気になるのでしょうか。どのレベルに子どもがいるか、どこまでいけるのかということ、この先生はよく知っている。他の教科でもよく知っていると思うのです。まずこれがあるのかなと思います。

また、学習の中で、十分に子どもに時間を与えていますよね。まず一人で考えて、グループで話し合っ、そして人の意見をとり入れながら、自分の意見を修正しています。どこかで文章にまとめて書く。こういうことがきっちりとなされています。

小学校でよくあるのは、「今から、ジャングル探検に行くからついておいで。」と、どこへいくのかわからないけれど、とにかく先生の背中を見ながら一列になってついていくというようなやり方です。これではしんどいので、「出口の方向は向こうだよ。途中でいくつかの関門があるよ。それをこうすればクリアできるよ。」と、ある程度のイメージを持って学習をこなしていく。そういう意味では、この授業は、これまでの積み重ねがこうさせているのでしょう。

先ほど言語活動の話が出ていましたが、私はもともと民間で働いていたことがあり、言語活動のことを民間の友達と話す機会がありました。

普通、民間のビジネスシーンというものは、あの授業の状態なのです。民間のプロジェクトチーム、例えば、新商品を開発するとか、商品企画をするとか、これは民間の姿なのです。この子どもたちが最後の方で元気な顔をしているのも、自分が時間を与えら

れて、思いきり活動できたことの結果だろうと思います。

秋頃に目標を設定して、秋には子どもたちをその段階までもっていくようにしている先生もいます。いろいろな工夫をしている先生がいるはずなので、それを出してもらったらよいと思います。この授業をされた先生にも聞いてみるのもよいでしょう。

委員長：「市で共有できるような、いい授業のイメージを作っていこう。」という話については、みなさんもそれでいいかなという風になっていると思いますが、よろしいでしょうか。

委員：(異議なし)

委員長：今ここで、どういういい授業があるかという話をするための時間はありません。具体については、どこかのワーキンググループなどでやってもらうことにしたらよいでしょう。今、お話が出ていたように、一足飛びにいい授業ができるわけではありません。氷山の一角で、背景には見えていないたくさんもの、先生と子どもとの関係などもあることでしょう。そういったことも含めて、「最高の基準を示して、みんなこういった授業ができるようにしましょう。」という方法もありますし、最低の基準を示して、「みんなこの基準はクリアしましょう。」という方法もあります。

それをどういう形にしていくのかということも含めて考えて、門真の一つの望ましい授業のあり方ということでやっていく。そして、小中連携、積み上げの話も出てきましたので、その部分も含めて一つの標準・スタンダードとして市で示していく。おもしろい取組ですし、やってみる価値はあると思います。このような方向で話が進んだ、ということを確認してよろしいでしょうか。

副委員長：例えば、門真市のスタンダードを作るということで予算要求をした場合に、「今の現状の授業がづくりがこうで、ここに課題があるから、こういうイメージのものをやります。」というところまで設計を描かないと予算要求が通らないのか、とりあえず要求をあげれば通るのか、財政部局とのやりとりの状況はどうなのでしょう。

委員：現状と課題については、財政部局との共通認識ができています。それを解決するために、「こういう方法で、具体的にこのような必要なものを作ります。それにはこのくらいのお金がかかります。」というような話をして、細部については、さらにつめていくような流れになります。

委員：小学校現場では、先ほどのような授業はある意味、形成しやすいです。それは、担任が毎日朝からずっと子どもと接しており、子どもとの関係が良いほど、授業も一つの形ができてくると思います。しかし中学校では、そうではないのです。成立段階が違うので、授業をこういう形で、というのは難しいですね。しかしそれではいけません。小中の連携を考えると、例えば国語であれば、国語の連携でどれを柱にするのかということですね。小学校では、教科書の中に全てが含まれていますが、その中でも「この部分は大事にしたい。ここでは子どもの思考を育てて中学校に送ってもらいたい。」というような教科ごとの柱があれば、その柱をもとに小学校の積み重ねができます。

中学校に行って、その柱のもとに授業を組み立てていくということであれば、中学校でもこのような授業ができると思うのです。

例のような授業は、小学校で終わってしまいます。中学校に行ったら、また新しいシステムの中で、一から始まっていくという世界がまだどこかにあると思うのです。だからそこは、教育委員会が小中連携に力を入れていく。あとは、教科ごとの柱を小学校はもっと作らないといけないし、「国語はここだ。算数はここだ。」というように、中学校の先生が、小学校の算数の時間には、例えば「図形に力をいれて。」などというように、教科ごとに柱を立てることが大事だと思います。

副委員長：小学校の授業をみてびっくりされたとの発言がありましたが、それは、中学校との指導観の違いだと思います。小学校は担任制で、全ての教科を教えなければならず、どうしてもあのような形になるのですね。中学校は、数学となるといきなり文字式が入ってくるわけで、抽象化の理論が出てきます。合わせて、自立しようということがあります。システムからいうと、そういう違いが客観的にあるのですが、子どもたちの学びでいうと、おそらく子どもたちはそういうことは意識していないのです。

門真の場合には、小学校と中学校の教員の指導観を、せめて中一の段階では合わせるべきだと思います。門真ではどうか知りませんが、生徒指導の問題もあるので、中一の段階で集団宿泊の合宿をすることがあるのですが、指導観を合わせないと、子どもたちはその段差についていけないのです。

もう一つは、中学校は、教科書の分量、出口の入試という問題もあるので、そんなにゆっくりはしてられないという問題もあります。でもそこは、どのように授業の中で子どもの学習活動を入れていくか、ここは指導観を合わせないと、中学校の先生が変化できるかという話になると思います。そういう点も事務局は考えておかないといけないと思います。

また、学校の先生方は多忙なのです。非常に忙しいのです。家に仕事をもち帰って、明日の授業をどうするか考えないといけないですし、中学校では部活動も生徒指導もあります。

リーダー層となってくれる先生方がたくさんいらっしゃるので、教育委員会もしっかりサポートしてもらうような仕組みをスタンダードをつくる時に入れておく。学校には、リーダー層の先生もいるし、5時になったら保育所にお迎えにいかなければならない先生もたくさんいます。それはそれでいいのです。がむしゃらに走るタイプの先生もいるので、それで一つの組織となるわけです。多忙でもがんばる人、でも、早く帰るからためなのではなくて、早く帰って家で授業づくりを一生懸命する人もいるので、そのあたりをサポートしてほしいと思います。

自分も学校現場にいて、本当にしんどかったことを覚えています。小中学校の先生方は、この6月、7月で、痩せたのではないかと思います。

委員長：今、スタンダードをつくるにあたって、いろいろな条件があるというお話をいただきました。スタンダードを作っても、それが受け入れられなければ回らないですね。それを受け入れられるだけの指導観を、小中学校でそろえるという話もありましたし、教科のつながりを考えた方がいいとのお話もありました。そのようないろいろな条件を満たして、一つのスタンダードを作っていくという話だったと思います。「これが門真市のスタンダードです。」と言って終わりではなく、実際にそれが機能するようにするには、どういう条件を満たすとよいかというお話をいただきました。

リーダー層に働きかけるというお話もありました。今のは大事な条件でしたので、事務局には記録していただいて、あとで実行していただきたいと思います。

今、広めるというお話がありましたが、市全体で広げていくための努力がいます。小中連携の意見も出ていましたが、そのあたりで意見はありませんか。

委員：我々教師の側の見方がずれている可能性がありますので、保護者代表委員の意見もお聞きしたいと思います。

委員：先ほど、先生の「くやしかった。」との発言を聞いて、とてもうれしかったです。先生はやっているつもりでも、子どもたちはやっているとは思っていない、という資料がありました。まさにそのとおりだと思いました。

私は、参観に行っても、授業を見るのが好きなのです。高校時代から、「自分ならこのような授業をするのにな。」などと考えながら授業を見ていました。ですから、今もそういう目線で授業をみます。

子どもが小学校1、2年生の時には、2時50分に授業が始まるのなら、2時50分に教室に行っていました。今は、2時50分に始まって3時30分に終わるのなら、3時20分に教室に行きます。なぜならば、私の子どもの頃の授業と比べて、面白味を感じないからです。授業をみていて、「もっとこうやって教えたらいいのに。」と思うことがあります。

自分が子どもの頃には、先生たちは黒板に掲示物をいろいろ貼ってみたり、算数の時間に大きな分度器を持ってきたりして、いろいろな工夫をしていました。何かを書いたりするだけの授業ではありませんでした。社会で、日本の風土の勉強をするのに、全国の小学校の一覧表から3校を選ばせて、その学校に手紙を書くというような授業もありました。その先生は、手紙の文章も全て子どもたちに書かせていました。最後は、先生が相手の学校に対して、「こういう授業をやっていますので、よければ返信をください。」と全部きちんとやっていたようです。それが未だに記憶に残っています。

今の子どもたちが大人になった時に「あの先生があんな授業をやっていたよなあ。」と思えるような授業を、先生たちはしてくれているのかなという思いもあります。自分は、先生ではありません。一般の人に「先生、ちゃんと授業をしてるの？」と言われて、「先生たち、くやしくないの？」と思いました。くやしかったら、もうちょっとどうにかな

らないのかと思います。先生が「やったる。」と目を輝かせていたら、子どもにもそれが伝わって、伸びてくると思うのですね。

他の保護者に聞いていても、「あの先生の授業はおもしろかったよ。」というように見ている方もおられます。班活動の中で発言させることで意識が…という話がありましたが、以前、「自分の定位置は決まっているのだから、班長になる子はなればい。なれない子は、自分はその位置なのだから、それを自覚して生きていけばよい。」というようなことを言った先生もいました。だから、話をして定着化させて広めていくといっても、本当に門真の先生たちが同じ方向を向いて、「子どもたちのためにがんばってやって行こう。」という気運になるのかな？というのが基本的にはあります。

先生によっては、やり方は違っていいと思うのです。そのために学習指導要領はあると思うのですが、「その指導要領に則った授業さえしていれば、個性を生かした授業はできないのかな。やはり最低限のことは決めていかないと、先生が変われば、違うことをやってしまうのかな。」などと疑問に思ったりもします。基本的には、「決めたところで本当に先生たちが、みんなが同じ意識でやれるのだろうか。」と思います。

でも、子どもたちが学校や勉強に向かうために、保護者も何か働きかけをしなければと思います。先生方ががんばれるためには、「自分は何でもする。だから、先生ががんばって。」と思っています。

委員長：先生の心が熱くならないとだめですよ。何だ、こんなことか。」と思われてしまったら、スタンダードの負けになります。だから、スタンダードというのは、ただ文字が書いてあるものではなくて、もうちょっとイメージ豊かなもので、子どもの様子のようなものがあるものにする。

門真の先生方がみんな同時にやるのではなくて、ぐっと進むところがある。それを見て「うちもやってみよう。」というものなのかもしれません。戦略を練らないと、ただ作ればおしまいというわけでもなく、それをどう広めるかを考えなければ、あつくはならないでしょう。でも、みんなが同時にあつくはならないだろうから、あつくなつた人に、先行的にやってもらおうということも考えられるでしょう。

委員：私は中学校現場しか知りませんが、門真の先生はがんばっていると思います。中学校に関しては、生徒指導やクラブなどたくさんある中で、授業も準備しなければなりません。中学校では、客観的にみると、他市よりは苦勞もしているし、よくがんばっていると思います。

委員：先ほどの発言には、名言がいっぱいありましたね。大人になっても覚えられている授業。教師が同じ方向を向いたら、すごいことになると思います。門真市の中でも、同じ方向を向いたら、成果があらわれた小学校がありましたよね。一方で、「門真だからできない。」と思っている人もいるのではないのでしょうか。

委員長：今の話を聞いていると、興味深いです。先生方はがんばっていないというわけではない

と思います。だけど、それがどれくらいなのか、見える形になっていない。例えば、前の学力調査では、似たような状況の学校で、学力や意欲の結果がずいぶん違っている場合があります。「どうしてこう違うのだろう。」と見ていくやり方もあるのです。状況が全く違う学校を比べても意味がないのです。「効果のある学校」ということもあります。ある条件で同じという地区を見ていったときに、こちらは比較的問題が少ないけれど、こちらは問題が多いなどというように、その中で自分たちのやっていることが確認できていくのです。ですから、同時に先生方のがんばりが出てくるような指標を開発していかないと、結果がなかなか出てこない。誰と比較して出てこないかという、本来比較ができないようなところと比較していると、先生たちのやる気は持続していくのかなと気がしますね。

ドイツでは、学力調査をやっている時に、「お宅の学校と似たような学校はここですよ。」というのを知らされるのです。その学校は、どこが比較対象なのかはわからないのですが、「そこと比べて、うちはどうなのか課題を見つけていきましょう。」となります。でもその学校は、すごく成果が上がっていると評価できても、全体の序列でみると下の方になるかもしれない。それは、また別の施策が必要になってくるわけです。

先生たちのがんばりは私にもわかりますので、先生たちのやる気をそがない形で作ることも大事なのかなと思います。それは非常に難しく、時間のかかることです。やろうと思えば10年くらいはかかります。ただ、10年間、門真をこのまま何もしないで置いておくというものでもないと思います。がんばっていないからこれをやるという訳ではなくて、それぞれの部署で、最善をつくるためにこれをやっていくんだという形で考えていくのが大事だと思います。

予算措置のことも話に出てきました。現状での予算措置はどうなっているのか、事務局より説明してください。

事務局：現在の学力向上に向けての予算措置について説明します。

今年度の市教委における学力向上にかかる事業として行っておりますのが、小学校5年生対象の「学習到達度調査」です。これは新規事業です。

二つめが、「スクールアドバイザー配置事業」です。これは、門真市立学校の退職校長を3名配置し、各校に対して、授業の指導や、経験年数の浅い教職員の指導、保護者・市民の対応、管理職の研修会、管理職の相談等を行っています。

次に、「学力向上支援員の配置事業」ですが、これは小学校9校に教員を市単費で配置しています。その9校では、市単費の教員が配置されることにより、各校で学力向上を中心に行う教員の授業軽減を行っています。

次に、「門真市教育研究指定校事業」です。資料として、本年度の研究指定校一覧を用意していますのでご覧ください。これは9校を研究指定校として、年間30万円を補助して、授業研究を行い、取組の発信を市内全域に行うものです。9校それぞれが、さま

ざまな方法で学力向上の目的のために取り組んでいるという状況でございます。

「学校組織研修・授業改善研修」もでございます。平成24年度授業改善研修の一覧をご覧ください。今年度新規として、授業改善のために授業づくりセミナーを実施します。小学校算数の授業づくりセミナー、中学校数学の授業づくりセミナーを夏休み中にそれぞれ3回行います。今年度、主なものとしては、以上のような事業を行っているところであります。

委員長：一番目の「学習到達度調査」以外は、スタンダードを広める上でも随分関係しているもので、活用できるものもたくさんあるように思います。

「門真の授業スタンダード」をつくるというのは、新しいプロジェクトだと認識しているのですが、それでよろしいでしょうか。

委員：(異議なし)

委員：「授業改善研修」は、すごくうれしいなと思います。私は数学担当なのですが、こういう機会を与え、新規につくってくださっているのがうれしいです。やはり、授業がうまい先生に来ていただいて教えてもらえる機会があれば、意欲がわくので、今後も機会を多く作ってもらいたいです。

委員：本校には学力向上支援員が配置されています。二つの点で効果がありますし、来年度も継続してもらいたいという思いを持っています。

全国の校長会アンケートによると、「新学習指導要領に則った中で、基本的知識・技能の習得のために、一番大事だと思われる施策は何ですか。」という質問に対して、一番多かった回答が、「少人数加配教員の配置」でした。全国の93.5%の校長が、少人数指導加配教員は、基礎・基本の習得については非常に効果的であったので、充実してほしいと回答していました。

少人数加配教員は、1名配置の学校と、2名配置の学校とがあります。1名配置の場合には5年、6年の算数・国語の取組で、2名配置の場合には3年、4年、5年、6年の取組で活用した経験があります。私の学校では、現在は2名配置です。以前は1名配置でしたが、3年生から少人数指導に取り組むということは、効果は大きいです。

門真市の学力向上支援員は、文部科学省の少人数指導加配の門真市版という面もあります。これが、9名になったということは、市にとっての最大の力ではないかと思っています。本校にも学力向上支援員をいただいています。その効果を厳しく問われても結果を満たすという気持ちで取り組んでいかないといけないという思いがあります。できれば、学力向上支援員の配置は、さらに充実をお願いしたいです。

委員：今出された意見の二つは、とても大きいなと感じています。授業改善研修を実施してもらえるとすることは、みんなで話ができ、それを校内で持ちよって発信できるということです。

今、現場で一番混乱していることの一つは、学習指導要領が変わったことです。算数

科において、3、4年に教える内容がぎゅっと入ってきたのです。私は算数の担当をしているのですが、授業日数と、その指導にあてられている日数を合わせると、4年生ではテストや復習の時間をぬいても指導内容が入りきらないくらいです。先ほども「発表の機会が少ない」とのデータがありましたが、これは学習指導要領の改訂が大きく関係しているのかなとも思っています。そのような時間のゆとりを保障した授業ができないのかなと思います。

ただ、門真市の場合、学力向上支援員を配置していただいているので、授業の研究や、復習、丸つけ、やらないといけない業務を短縮してできるというところは大きいです。私も、学力向上担当の役割を担っていますが、授業時数を軽減していただいているので、それに対する対策も練っていけるということがあります。そのようなところからも、ぜひこの加配は継続・充実させていただきたいと思っています。

委員長：それぞれ大変効果があるので充実させていただきたい、という意見が出されました。今の話とは別個に、こういう予算措置があれば、という意見はありませんか。

副委員長：学力向上支援員は9名いるので、金額もかなり高いと思います。効果も上がっているということですので、継続させていただきたいです。

授業改善をしていく場合に、裏側で、学校の図書館を充実させた方がいいと思います。先ほどのデータを見ると、標準図書冊数をクリアしている学校が少なくなっています。豊能・三島地区の学校では、8割方はクリアしています。国から市には、地方交付税交付金で、それなりのお金が入っています。でも、一般財源に入るので、市は好きなのところに使えるという状況になっています。子どもは、学校の図書館が充実していたら、そこへ行くのです。中学生も同じです。そこに人がいれば、寄りつきやすいのです。人がいないと図書館には行かないのです。そういう意味では、学校に司書教諭はいらっしゃるけれど、司書教諭は授業を受け持っているので、なかなか図書館にはいられません。この人たちをバックアップするというのも重要です。

司書教諭なみの人が、退職教員でおられて、その人たちが応援しに来てくれるような、無料でできるようなシステムをつくる。本を入れるだけでは図書室はまわりません。やはり人は要る、と思います。常駐はしなくてもいいですけど、一日の時間のうちこの時間からこの時間の間はいますよというようにする。第二の保健室になるという可能性もありますが、子どもにとっては一つの憩いの場になります。

私は図書室が結構カギをにぎるのではないかと思います。

古い本は捨てるとういいます。ただ、本は備品となっているので、法的には捨てられないのですが、古い本は捨てないと、私たちが子どものころにあったような図鑑がまだ入っていると思います。ほとんどの学校はそうです。だからそこは変えていかないと、小学生が本を借りようと思っても、中学生が朝読書の本を選ぼうと思っても、本は借りられないと思います。

委員：数年前から国の財政措置、交付税措置されている分の割合の額については、教育委員会として学校に配当し、本を増やしています。しかし、先ほどおっしゃったように、古い本の廃棄の問題や、もともと本が少なかったというようなこともあって、図書標準は達成できていないという状況にありますので、さらに本を増やしていくように努力していきたいと思います。

委員：私が子どもの時の図書室には、迷路のようにたくさんの本棚が並んでいましたが、今の学校の図書館は、一面に本が並んでいるだけです。図書館を充実させるために、古い本を置いておきながら、新しい本も入れて充実させる方がよいのではないのでしょうか。古い本はいらないものなのですか。

副委員長：古い本は、読めないということや、子どもの実態に合っていないということもあります。子どもたちに本を提供する時に、背表紙だけ見せても、子どもは本を手にとらないのですね。本の置き方を工夫している学校もあります。どんな本が子どもにとって必要で、人気があるのか、それは学校の教員が一番よく知っています。だから、学校の先生方が図書室を上手につくるといいと思います。以前、寝屋川市のある小学校で、教師だけで図書室の改造をした例がありました。クリーニングの針金のハンガーを曲げると、本が飾れるのです。すると、いっきに子どもの本の貸し出しが増えました。

中学校も朝読書をしていますから、好きな本があれば本を読むでしょう。昔の〇〇全集などは、読みませんよね。子どもが気軽に読める本を置いてあげることですね。

委員：確かに先生が忙しいのもわかっているつもりです。だから、親も一緒になって、学校支援地域本部の活動をしているのです。図書室にしても、図書室開放にしても、必ず教員免許を持っていないといけないのか。それが地域の方でも週に1時間でも2時間でもきてもらえるならそれでもよいのか。それでも子どもたちにとってはいいのかなどと思います。地域の方とか教員以外が学校に入るということは、学校の先生も地域と一緒にやってなければ、どちらかに拒否反応があるとうまくいかないと思います。

子どもをみていると、特に「まなび舎」では、低学年は漢字の宿題を持ってきます。先生は忙しいですから、丸つけしてくれてはいますが、突き出たらだめなところを突き出して書いている場合でも花丸をしているのです。子どもにとっては、先生が一番なんです。「ここ、まちがっているよ。」と地域の人が教えても、子どもは「先生が丸しているもん。」といます。

丸つけは、地域や保護者の方でもできるのです。先生が忙しいのなら、子どもたちに授業に向いてもらえるのなら、簡単な業務は一般の人に譲って、資格を持った先生は授業で子どもたちに向かうというのも、学校支援としては必要なことだと思います。学校支援として野菜作りや環境整備も必要ですが、本来の支援は、学力支援だと私は思っています。学力支援のためには、先生を支援してあげないと、と思います。自分もなかなかそのような活動ができずもどかしく思っています。そのあたりも活用しながら、全部がうまくまわ

ればよいなと思います。

副委員長：ありがたい話ですね。

委員：先生には、本来の業務をやってもらいたいですし、地域の方も学校に協力しようがんばっておられます。学校にもそのあたりを理解していただいて、地域に耳を傾けてもらいたいという願いをもっています。

委員：宿題でまちがえているのに、丸しているものがあります。ちゃんと見ていれば、誰が丸をつけていても、親も納得して、クレームも減ると思います。

今は若い先生が多いので、保護者から見れば年下が多いのですね。だから、いろいろと言われますよ。その歯止めをかけさせるのは同じ保護者です。保護者が目を光らせて見て、「あの人はあんなことを言っているけれど、本当はこうですよ。」と言うことで、結構歯止めをかけることができると思います。子どもたちが学校に向かう環境については、先生方ももっと保護者や地域を信用していただいて、うまく活用してもらえればよいと思います。

委員長：コンビネーションがうまくいくとよいですね。

今出された課題は、次回委員会「家庭学習」の際に議論しましょう。今日は、「授業づくりについて」が議題でしたが、いろいろなことがからんでくるのですね。

本日は、授業づくりについて議論していただき、ありがとうございました。

大きなポイントとしては、門真市の授業スタンダードをつくり、それを広めて、先生方の心に火をつけること。それから、今行われている事業も大事なことなので、継続していくこと。最後に、読書環境、学校図書館の整備、本の活用、読書活動、読書教育への活用、それらのことを学力に結びつけていくということになりました。

事務局には、今日のことを整理していただいて、予算要求に向けて、これらの意見を反映させていただければありがたいです。次回は、家庭学習について意見交換を行います。

以上で、第2回学力向上対策委員会を終わります。

課長：密度の濃いご審議をありがとうございました。次回、第3回学力向上対策委員会については、依頼文書を机上に配付しております。8月9日（木）午後3時より、市役所本館3階第三会議室で開催します。ご多忙中とは存じますが、ご参加のほどよろしくお願ひ申し上げます。本日はどうもありがとうございました。